

第2回 旧菓子文化会館等再整備基本構想検討懇話会 議事概要

【開催概要】

日時：令和7年8月25日（月）13：30～14：45

場所：金沢市役所第二本庁舎 2階 2203会議室

【議事要旨】

<宮下座長>

- ・本日の目的は、次回の基本構想とりまとめに向け、施設の役割や視点を整理することである。
- ・旧菓子文化会館と泉鏡花記念館を個別の機能として捉えるのではなく、泉鏡花記念館を核としながら、一体の施設としてどのような役割をもたせるのか考えたい。
- ・尾張町は木の文化都市のモデル地区にもなっているという観点でもまとめたい。

<東委員>

- ・泉鏡花記念館からは収蔵庫と展示室を整備してほしいとの要望を聞いている。また、現在の記念館の奥ゆかしさの維持や、高座のような集客施設の要望も聞いている
- ・収蔵については、温度・湿度の管理をしっかりしてほしい。泉鏡花記念館は紙の資料が多く、光に当たると劣化するため、遮光性が必要となると聞いており、また、防虫性も必要である。
- ・借用している収蔵品もあるため、全てガラス張りの収蔵庫は難しい。
- ・スペースが確保できるならば浅野川周辺の5館の収蔵庫の補助機能としたいが、収蔵品の性質を踏まえた収蔵庫を検討しなければいけない。
- ・収蔵品の性質によっては、ガラス張りにせずとも壁面に展示ケースを組み込み、窓から覗くのもよいと思う。

<事務局>

- ・提示したのは少し極端な例である。収蔵品が優先されるということは何よりも大切であるが、どのような収蔵の工夫ができるかは、今後の検討において考えていきたい。

<東委員>

- ・奥ゆかしさということで、前回の検討懇話会で指摘があったように、雁木造りがあるとよい。

<宮下座長>

- ・奥ゆかしさをどうデザインするかが一つのキーワードとなる。
- ・新町・鏡花通りのスケール感と国道159号線側のスケール感は随分と違う。この面白さを最終的にどうデザインをしていくかは非常に大きなポイントとなる。
- ・全容がすぐに見えるのではなく、誘導されながらワクワクするような、まちのスケール感を感じさせる空間がデザインされると素晴らしいと思う。
- ・見せる収蔵庫についても、たくさんある収蔵物をどう見せていくのか、ただしまい込むだけだともったいないという話もある。許す限りで貴重な紙の資料をどう見せて、どう扱うかがポイントになると思う。

<山田委員>

- ・泉鏡花の作品は日本人向けの作品だが、日本人にとっても難しい作品が多い。
- ・新幹線開業以来インバウンドの方が多く、2・3日滞在され、家族で散歩く姿をよく見る。店舗のお客さんの半分はインバウンドの方である。
- ・泉鏡花に限らず、インバウンドの方が楽しめ、印象に残るようなスペースがあるとよい。

<事務局>

- ・泉鏡花記念館を核としながら、情報収集や休憩ができる空間が必要になると考えている。
- ・泉鏡花を含んだ周辺の地域の魅力を発信するための多言語案内など工夫をしていきたい。

<宮下座長>

- ・施設の一体化を考えていく中で、泉鏡花とそれ以外の体験などがあまりにかけ離れてしまうと、別々の機能に見えてしまう。そうなると面白くなく、もったいない気がする。
泉鏡花のベースは日本語の文学であるが、その文学を日本語だけではなく、体験や町民文化も含めたビジュアルとして見せるとよい。それに、泉鏡花を核とした尾張町の文化のフィルターをかけ、物語を作っていくことで、インバウンド方に向けた文学だけではない世界観をデザインできると魅力的になる。
- ・インバウンドの方には見せ方を工夫することで、文章自体を読めなくてもその世界の雰囲気を感じ取ることができ、尾張町の魅力を感じていただけたらと思う。

<深谷委員>

- ・市内事業者と体験型のコンテンツ開発をしている中で、インバウンドの方が受入れやすいものは日本人の子どもにとっても分かりやすいと感じている。分かりやすさというのは、インバウンドの方であろうと日本人、来外者、地域の方であろうと必要になってくると感じる。
- ・福井県の芦原温泉にあるアフレア内のふくいミゅ〜ジウムに、温泉の桶ですくう体験ができるコーナーがある。海外の事業者を案内した際に、分かりやすさという点で評価が高かったので、ポイントになる道具などがあるとよいと感じた。
- ・話題性も大事であり、最近よく目にするのは石川県立図書館である。写真映えがする図書館でもある。当図書館は「思いもよらない本との出会いや体験によって、自分の人生の1ページをめくることができる場所」というコンセプトがある。泉鏡花をきっかけにして、新たな施設を知ってもらうこともあれば、逆に施設を知ることで泉鏡花や木の文化を知るきっかけになることもあると感じている。
- ・新たな施設は周辺の観光施設のハブになるような場所である。この施設を拠点として別の施設へ出かけていくようになれば嬉しいと感じる。

<事務局>

- ・木の文化を象徴する施設を目指し、日本中から注目を浴びるような施設になることを考えている。

<宮下座長>

- ・飲食スペースは併設されるのか。

<事務局>

- ・資料にはカフェ等の飲食スペースは記載していないが、交流機能として、飲み物を提供するスペースも必要かとは考えている。

<宮下座長>

- ・菓子文化に関連したものは考えているか。

<事務局>

- ・菓子文化については周辺に商店や和菓子屋さんがあるので、民業圧迫に配慮した範囲で考えていく方向である。

<宮下座長>

- ・分かりやすさはキーワードとなる。特に、若い世代に着目すると、畳に座ったことがなかったり、襖や障子を見たことがない子どもも多くいるのではないか。日本の若い世代と外国の人は、喜んだり、感動したり、目新しさを感じるものが同じになってきているのではないかと感じる。
- ・本物に触れるという分かりやすい体験は、金沢でやる意味があるのではないか。例えば、プラスチックのお椀で食事をするよりも輪島塗のお椀で食事することで、違いを感じるような感覚や体験、舞台の衣装を近くで見られるような体験があるとよい。
- ・金沢らしい見せ方として、言葉を介した説明がなくとも、本物をうまく見せることによる分かりやすさ、感動というものがあると思う。

<西本委員>

- ・4つの機能として体験、交流、発信、収蔵があるが、一つの施設として整備する上でそれぞれの機能の繋がりを大事な位置づけとして、盛り込んでどうか。
- ・運営やプログラムの中で連携していくと思うが、空間的にも視覚や動線でそれぞれの機能が繋がることで、来館者にとっての気づきや出会い、活動が重なっていき、内部の相乗効果を生むような空間になると非常によいと思う。ハブになる施設という話もあったが、そのような施設になればいいと思う。

<外山委員>

- ・泉鏡花記念館の位置付けが気になっていたが、今の検討だと泉鏡花の持つ意味は大きい。泉鏡花の持つ日本的な雰囲気や空間は大事にしたい。
- ・金沢では文化施設が非常に増えている。市内には徳田秋聲記念館や安江金箔工芸館、方向性は違うが旧野町公民館では学生向けワークショップが開かれ、旧新堅町小学校の跡地整備などもある。本整備では旧菓子文化会館に泉鏡花記念館が隣接しているので結び付けて考えていくが、都市計画として周辺施設との結びつけの方向性が明確ではないような気がする。金沢駅東の都ホテル跡地から片町までの都心軸の整備といったことと関係があるのかなど検討が必要だと思う。
- ・この懇話会の意向としてはよいが、金沢の将来として、市民、インバウンドの方、子どもたちにどう繋げていくかが見えにくいと思う。この辺りをもう少し明確にすることで、この再整備計画が市民にとってわかりやすいものになると思う。
- ・再整備にあたって、小劇場も備えとすると、市民芸術村との関係で、市民芸術村は前衛的な創作で、新たな施設は古典をやるのかなど棲み分けが必要ではないか。

<宮下座長>

- ・他施設との棲み分けや連携の方法などどのように考えているのか。

<事務局>

- ・具体的な他施設との連携、役割分担の方針は検討していないが、尾張町の立地特性は都心軸に近接している一方で、独特の藩政時代からの商人文化、町民文化という都心軸にはない魅力を持っている。さらに東山や主計町にも近く、泉鏡花記念館は開館してから約四半世紀が経つ。そういった立地特性や文化的背景を生かした施設を整備したいと考えている。
- ・市民芸術村は色々な公演もやっているが、基本は24時間、365日使える市民の練習の拠点といった位置づけになっている。本施設に小劇場を備える場合、泉鏡花の演目や寄席など大衆芸能もありつつ、それ以外にも多目的に使用できることを考えている。

<外山委員>

- ・本施設だけではなく金沢市内の他施設も常に意識した整備をしてほしいという思いである。
- ・かつて新町・鏡花通りの商店は、大通りに出店することが商売の夢であり、それをずっと守ってきた。個人的には、大通りの道路が広くなりまちなみが変わることはあまり面白くないと思っている。
- ・通りの雪明かりや行燈の光、木虫籠から見える外の風景など昔の金沢の人はこういったところで暮らしていたのかと、インバウンドの方が展示物ではないもので感じられる雰囲気建物であればよい。
- ・あかり坂や暗がり坂、主計町の細い柳の通りなども夜に通ると独特な雰囲気がある。金沢は奥深いということがわかるものであるとよい。泉鏡花の作品の持つ雰囲気に対して、形ではなく心に残るような建物であるとよいと思う。

<宮下座長>

- ・私も本当に賛同する部分が多い。尾張町というまちは、全国でも例がないようなまちである。目抜き通りでありながら、今でも藩政期以降同じような土地割りで、地元の方たちが土地を持っていることは他の大都市にはあまりないことである。
- ・新しい建物やマンションも建ってはいるが、その中でまちなみがまだ残っている非常に珍しいまちであり、そこに商人や町民文化など文化レベルの高いものもまだ残っている本当に面白い特徴がある。金沢の中でも尾張町にしかない特徴である。
- ・木の文化都市ということで、木を使うことで当時からずっと脈々と流れている金沢らしい文化を出せるとよい。そこに泉鏡花という一つの切り口が加わって、ひとつの世界をソフトもハードも含めて作れると素晴らしいのではないかと。尾張町のアイデンティティとして、同じような文化施設や記念館とは違う、尾張町でしかできないものを作れるとよい。
- ・インバウンドの方の通り道にもなっていることを考えると、ちゃんとしたお茶が飲める場所があってもよい。金沢は全国的にもお茶をやっている方が多く、武士階級の嗜みだったものを金沢では町人がこぞってやっていたということが広がった大きな要因であると思う。施設に入るコンテンツや体験を一つの物語として繋げられるとよい。

<細川委員>

- ・ラーケーションを取り入れたら面白いと思う。ラーケーションはラーニングとバケーションを組み合わせた造語で新しい観光の在り方として日本で広がっている。
- ・ラーケーションは本物を見せる分かりやすさ、体験して見て感じて学ぶことを体現しているコンテンツではないかと思う。学校以外で文化に触れることや親子で学ぶことをこの施設でできると、若者に限らず子どもたちにとっても面白い施設として利用できるのではないかな。

<宮下座長>

- ・ラーケーションは面白いキーワードだと思う。
- ・若い世代の方たちにとって、文化体験施設はお年寄りの方が行くイメージになりがちである。金沢21世紀美術館は、最初は若い人たちが行くイメージがあったが、現在は幅広い年齢層が来館している。新たな施設もインバウンドの方、日本人、色々な世代の方たちに体験しに来てほしい場所である。

<細川委員>

- ・収蔵に関して、ガラス張りで直接目に見えることは若い世代にとってわかりやすいのではと思う。そこに金沢らしいデザインや見せ方が加われば、若者を惹きつけることができるのではと思う。

<外山委員>

- ・資料に展望デッキの案があるが、あの土地に高層の建物が建つことはないし、建てる意味を感じない。3・4階程度に展望する場所を設けても、話題となるか疑問を感じる。
- ・明かりとりの窓があり、そこから外が見える程度ならよいが、この場所の高さからまちなみを見る意味はあるのか。まちなみにそぐわないのであればやめた方がよいのではないかな。

<宮下座長>

- ・展望デッキを作るために建物を高くしようといった話ではなく、必要な機能を積み上げていくと概ね4階建て程度の施設になると想定している。上層から金沢のまちなみの構成を見る場所は意外と少ない。卯辰山の山並みが浅野川を挟んで向こうに見えたり、金沢城が見えたり、ひがし茶屋街の方を見ると黒瓦が連続しているまちなみが見えたりという場所はあるようでない。来街者でも地元の方でも金沢のまちの構成を捉える場所はあってもよいと思う。
- ・海外にあるような物凄く高い建物を作って上から全部見下ろすような意図ではないと思う。まちなみや周りの雰囲気壊さず整備することが大事である。

<細川委員>

- ・展望する際は、まちの中心から少し離れたところから中心地を見ることが多いが、まちの中心地から金沢を見るとどのような感じなのか気になる。展望デッキに上がるまでに、施設を下の階から巡った後に上層階で現在の金沢のまちなみを見ることができると来館者の心を揺さぶるものがあるのではないかな。展望デッキのニーズはそれなりにあるのではと思う。

<西本委員>

- ・骨子案に加えるべき視点や役割として、今後の具体的な検討においては、今回挙げられた各機能の面積を算定し、建物全体のボリュームを明らかにしていくことが求められる。機能を単に積み上げるのではなく、周囲のまちなみとの調和や適正な規模を考慮する視点が欠かせない。
- ・周辺との調和や奥ゆかしさは、まち全体の価値を高める要素となる。その観点から見ると、展望デッキは、まちに新しい視点をもたらし、地域全体の価値をさらに高める存在となり得るのではないか。

<宮下座長>

- ・全体のボリュームがどうなっていくか、当然検討も必要である。全体の構成の中で、おおよその規模の調整はあるかと思う。
- ・委員の総意として、まちなみに対してあまりにも圧迫感を与えるボリュームはやめた方がよいと言える。

<東委員>

- ・金沢の文化を未来に残していくためには、新たなファンを獲得していく必要がある。そのためには、泉鏡花の企画展や展示も頑張らなくてはいけない。
- ・木の文化都市の話もあるが、建築文化の視点でも金沢のファンが多い。石川県立図書館の話もあったが、建築物としても魅力がある建物になると相乗効果が出るのではないかな。

<外山委員>

- ・木の文化都市という観点で北陸での難しさを感じる。木は有機物であるから、いずれ朽ちていくが、尾張町の古い町家が朽ちていないのは、軒が深く出ており雨風から守られていることがあげられる。
- ・木の美しさというのは新築の際の木目のはっきり分かる状態もあるが、時間とともに雨風によって柔らかい夏目がすり減り、硬い冬目が残っていき、浮造りとなる。色もねずみ色に変化していく。朽ちていく経過が楽しめることが文化である。いずれは朽ちていくことが感じられるデザインであるとよい。
- ・石やレンガは年月とともに、急激にはではなくゆっくりと擦り減っていく。木というのは朽ちていくものであるが、状態によっては千年近くも持つものもある。木の年代を感じられる雰囲気建物であればよいと思う。

<宮下座長>

- ・ただ単に木のある都市と木の文化のある都市は微妙に違うと思う。木の文化というものは、時間の経過や経年変化、それを作る人、修繕する人、使う人というのが一体になって繋がっていると思う。金沢はこれらを残すための職人大学校があり、使う人もそれを理解して使っている。だからこそできる美しいデザインや風合い、まちの色があり、こうした部分に木の文化というベースがあると思っている。
- ・木を使うことは、手間がかかる。朽ちること、色が落ちることを意味のある手間としてまちの色を意識したデザインとするとよい。
- ・金沢美術工芸大学に行った際に、アートギャラリーにて平成の百工比照という展示があった。様々な工芸資料があり、これは職人の文化であるが町民文化に近いものでもあると思う。

<西本委員>

- ・金沢美術工芸大学のギャラリーでいつでも見ることができる。巧の技や工芸技術を紹介するもので、サンプルで作品のストックがあり、自由に手に取って見られる展示形式になっている。

<宮下座長>

- ・加賀藩の時代から収集し、整理し、よいものを色々な人たちが自由に見られる状態にしていることは、莫大な労力と手間がかかるが、それを後世の人たちの勉強のために見せることはすごいと思ひ、そのことを金沢美術工芸大学が新たなキャンパスで引き継いで行っている。
- ・色々な展覧会場と連動した関連展示が見れると面白い。例えば、100点あるうち1点～10点程度の展示が本施設で見られると面白いと思う。

<深谷委員>

- ・本物を見せるということで、ひがし茶屋街の箔一が運営する店では、一人あたり16,000円程度で金箔貼りのプライベート体験を提供している。金箔の歴史を映像で紹介し、漆のお皿に金箔を振って自分で作品を作ることができる。特に、インバウンドの方からは作品を作る際、実際に職人が使う道具を使って製作することが非常に高い評価を受けている。
- ・また、店舗内の壁には何度も壁を塗り重ねた層が残っており、これも評価が高い。物の歴史が伝わるような展示があるとよいと思う。

<宮下座長>

- ・ソフト面での見せ方を工夫して、泉鏡花の世界観にも落とし込み、全体にどう繋げていくか、今後細かく検討が必要である。

<山田委員>

- ・今後どのような名称や外観になるかわからないが、地域の方が一度は訪れてみたい、もう一度訪れたくなるようなランドマークとなる施設になればと思う。

<外山委員>

- ・今後の具体的な検討において、各機能に必要な面積を算定することは難しいのではないか。

<事務局>

- ・設計の前段階である基本計画で概算面積を算定することになる。

<宮下座長>

- ・尾張町や周辺の方々が新たな施設に参画できる仕組みが大事だと思う。施設に訪れた来街者に対して、地元の人々の生業が生かされていることが見えるとさらによいのではないか。そのことが地元のお店に行くきっかけになれば、本来施設が発信したいことに繋がるのではないか。難しいかもしれないが、そうすることで自然に地元の人たちが施設に出入りするようにもなると思う。結果的にリアルなまちを感じてもらえ、それがわかりやすさや本物に触れるといったことに通じると感じる。

以上